

戦国合戦図屏風の基礎史料

堀ほり

新しん

はじめに

天正三年（一五七五）の長篠合戦を描いた「長篠合戦図屏風」が多くの歴史教科書に掲載されているように、戦国合戦図屏風の人気は高い。しかし、その学術的な研究は長い間低調であった¹。なぜなら、歴史学は伝統的に文献史料を研究対象とし、絵画資料は二の次であったからである。黒田日出男氏²や五味文彦氏³らおもに中世史研究において、絵画資料を歴史研究に活用することが進んだが、まだまだ発展途上⁴である。合戦図に関しては、高橋修氏⁵が現存する戦国合戦図屏風を集大成して、ようやく研究環境が整えられた。また美術史学からすれば、戦国合戦図の多くは作者不明のものが多く、狩野永徳らの作品に比べれば、食指が動かなかったといえよう。そのような傾向を克服すべく、筆者は「戦国軍記・合戦図屏風と古文書・古記録をめぐる学際的研究」⁶（以下、本科研と略称）というテーマで、歴史学・文学・美術史学との共同研究を進めている。偶然にも、金子拓氏・黒嶋敏氏を代表とする「戦国合戦図の総合的研究」⁷も企画されており、メンバーに重なりがあることもあって、協力することになった。金子氏らが「長篠合戦図屏風」に関して研究を進めていたこと⁸もあり、本科研では、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦、慶長一九〜二〇年（一六一四〜一五）の大坂の陣を主

対象として、合戦図屏風の調査を中心に研究を進めてきた。本稿は、その過程で入手した基礎史料を紹介し、合戦図屏風研究の基礎的研究となし、あわせて合戦図屏風研究の環境整備を進めようとするものである。取り上げる対象は、大阪歴史博物館所蔵「関ヶ原合戦図屏風」(いわゆる津軽屏風)に関する史料である。

一 関ヶ原合戦と津軽屏風について

関ヶ原合戦については、近年、白峰旬氏が精力的に見直しを進めており、また文学の側からの研究も進んでいる⁹⁾。本稿はこれらの論点に言及することはしないが、関ヶ原合戦をめぐる研究状況は大きく進展しつつあり、あわせて合戦図屏風の研究も進めなければならぬのである。

管見の限り、「関ヶ原合戦図屏風」は二五種類伝来している。これらの多くは近世後期に作成されたものであるが、唯一、合戦の直後に作成されたとされているのが、大阪歴史博物館所蔵「関ヶ原合戦図屏風」(八曲一双、以下津軽屏風と略称)である。後掲の「津軽藩旧記伝類」によれば、徳川家康の養女満天姫が、慶長一八年に弘前藩主津軽信牧へ興入れする際に、養父家康に頼み込んで、「関ヶ原合戦図屏風」二双のうち一双を譲り受けたという。津軽屏風は一九四・一cm×五九〇cmという他に類を見ない大きさと、金箔や緑青をふんだんに使用している点など、天下人家康が作成させ、手許に置いていたという伝承をなると思わせる。

しかし、絵師については未詳であり、家康が作成させたのであれば当代随一の絵師であるはずである。ごく最近、土佐光吉とその工房が描いた可能性が指摘され¹⁾、この点についての疑問はほぼ氷解した。しかし、これもまた後述するように、家康の関与を示す文献史料は近代以降のもののみであり、この点の不自然さは解消していない。もちろん、近世史料がないことのみをもって「津軽藩旧記伝類」の伝承を否定するものではないが、文献史料の基礎的な検討は必要不可欠であろう。

それでは以下、「津軽藩旧記伝類」とその関連史料、「日本名宝展」に関連する史料について述べ、末尾に関連史料を掲載しよう。

二 「津軽藩旧記伝類」とその関連史料

まず、「津軽藩旧記伝類」の概要について述べておく。本史料は、「津軽藩旧記類」の続編である。「津軽藩旧記類」は、明治七年（一八七四）に旧藩主津軽承昭から委嘱されて、下沢保躬等が諸書を参考し、津軽氏の始祖秀栄以来、明治四年の廃藩までの歴史を編纂して、明治一〇年に完成したものである。本史料は、その続編として藩主夫人や藩臣の列伝を記したものである¹²。この藩主夫人列伝のなかに満天姫があり、そこで津軽屏風について触れられている。両書は明治初年の編纂史料とは言え、典拠史料名を明示しており、比較的信頼のおける内容であろう。ちなみに、『津軽藩旧記類（纂）』は津軽信牧と満天姫の婚姻に触れているが、その他の津軽通史に關する歴史書において、津軽屏風について触れたものは、本史料のみである。

「津軽藩旧記類」「津軽藩旧記伝類」とともに、津軽家に献納されて公刊されなかった。ようやく昭和三三年（一九五八）に『みちのく双書』に収録されたが、この底本は弘前市立図書館所蔵本で、昭和三年に津軽家所蔵本を書写したものである。これによって、「津軽藩旧記類」「津軽藩旧記伝類」の内容が広く知れ渡ったことは大きな功績である。しかし、津軽屏風に関して言えば、典拠史料の「藤田氏旧記」を「藤田氏日記」と誤記するなど、致命的なミスもある。津軽家所蔵本が国文学研究資料館所蔵「津軽家文書」中にあるが¹³、これは所々に朱筆による訂正が入っており、清書本ではない。そのため清書本からの書写本によって最終的な内容や体裁を推測するしかないが、刊本『津軽藩旧記伝類』の底本は弘前市立図書館に所蔵されているはずだが、現在は草稿本しかみあたらない。

そこで苦肉の策として、刊本『津軽藩旧記伝類』（史料一）と東京大学史料編纂所架蔵の謄写本「津軽旧記伝」（明治一三年謄写、史料二）を掲げ、ここから清書本の体裁と内容を推測する手掛かりとする。そして、ともに草稿本である国文学研究資料館所蔵本（史料三）と弘前市立図書館所蔵本（史料四）を掲げる。いずれも、津軽屏風に関連する部分のみである。続いて、満天姫への津軽屏風下賜に關わる「古記集録下案」（史料五）、「津軽藩旧記伝類」の成立と藤田貞固の関わりを示す弘前市立図書館所蔵本の奥書（史料六）を掲げることとする¹⁵。

詳細は本稿末尾の翻刻を御覧いただくとして、史料一と二は若干文言の異同があるため、清書本の文言は確定できない。しかしほぼ

同内容であり、津軽屏風伝来の経緯を検討することに問題はない。ただし、典拠史料の名称は、「藤田氏日記」（史料一）ではなく、史料二～四にある「藤田氏旧記」であろう。ちなみに、弘前市立図書館にも国文学研究資料館にも、「藤田氏旧記」（もちろん「藤田氏日記」も）という名称の史料は存在しない。

また、満天姫の死亡記事の出典が、史料一と二は「津軽系譜」となっているが、史料三と四は「工藤家記」を消して「津軽系譜」と訂正している（史料三は朱筆）。このことは、史料一と二よりも史料三と四が草稿に近いことを示している。

そこで注目されるのは、史料四が「藤田氏旧記」という史料名を朱筆で記していることである。すなわち、満天姫への津軽屏風下賜の記事を記した当初は、このエピソードの出典が不明だったことを示している。史料六にあるように、「津軽藩旧記伝類」作成の中心人物の一人に藤田貞固がいる。「藤田氏旧記」は、この藤田貞固家に所蔵される旧記という意味であろう。弘前市立図書館にはこの藤田家に関する史料があるが、満天姫への津軽屏風下賜の記事があるのは、「古記集録下案」（史料五）のみである。史料五は「一名旧記当座留雑集」とあり、「津軽藩旧記類」と「津軽藩旧記伝類」の作成過程において、諸書から抜き書きしたメモ帳のようなものと考えられる¹⁶。したがって、史料名は不正確ながらも、藤田貞固家には満天姫への津軽屏風下賜のエピソードを裏付ける「旧記」が存在したのである。しかし、これが史料五では抹消され、史料四では朱筆で追記したところからすると、「藤田氏旧記」なる史料の実在性に疑問なしとはできない。

また、史料四の末尾には、幕府から津軽屏風について照会があり、その際には「焼失した」と嘘をつけて返却しなかったとある。もともとこの箇所は抹消されており、典拠史料も不明だったようであるから、信憑性には問題が残る。しかし、もともと満天姫は屏風の「拝借」（史料四のみ「拝領」）を願ったのであり、家康も「暫く預け置」いたものである。幕府から照会があったとしても不思議ではない。しかし、弘前藩史料の中に、いまだ幕府からの照会を裏付ける史料を見出せていない。そもそも照会の事実よりも、津軽屏風下賜のエピソードは、史料四の抹消部分とは言え「実ニ津軽家ノ栄余[※]」であるにも拘わらず、江戸時代に成立した津軽藩の歴史書に言及がないのは不審である。

このように、現在では満天姫のエピソードが事実として定着しているが、その史料的裏付けは薄弱なのである。もちろん、このエピソードを否定する材料もないが、津軽屏風を分析する際に、家康からの下賜を所与の前提とせず、虚心坦懐に検討すべきであろう。そ

れと同時に、文献史学の立場では、豊富な弘前藩政史料のなかから、津軽屏風と満天姫に関する史料を見出す努力を続けなければならぬだろう。

三 「日本名宝展」に関連する史料

津軽屏風が世間に知られるようになったのは、昭和五年（一九三〇）の読売新聞社主催による第二回「日本名宝展」である。第一回「日本名宝展」は前年の昭和四年三月十九日～四月十九日に、上野の東京府美術館（東京都美術館の前身）新館のこけら落としとして開催された。同展は華族や有力者のもつ名宝が初めて広く国民に公開された事業とされ、ここに出展しなければ名宝ではないとされることを恐れて、華族や有力者は競って出展したという。¹⁷ 第一回の目玉は藤原道長の「御堂関白記」であるが、合戦図では「後三年合戦絵巻」と「大坂陣図」（大坂夏の陣図屏風）、いわゆる黒田屏風）が展示されている。「大坂陣図」は人気を博し、三月二十一日から一週間の展示予定を延長している。

これに続く第二回は昭和五年四月十五日～五月十四日、前回と同じく東京府美術館で開催された。津軽屏風は「関ヶ原合戦大屏風」として出展されている。第一回と同じく、『読売新聞』は宣伝も兼ねて開催前から連日名宝展の様子を報じ、「日本名宝物語」の連載では出展する名品の一部を紹介している。津軽屏風は四月五日に「日本名宝物語」三五として取り上げられ、四月二十五日には「名宝漫描」三としてイラスト付きで紹介されている。¹⁸ ここでは、津軽屏風が名宝展のために初めて発見されたとされている。そして、津軽屏風が「わが邦戦画中の金字塔」であり、徳川家康の似顔と鎧武者が二〇二六名描かれていると紹介されている。

「日本名宝物語」の連載記事は、その後第一回と同じく単行本化され、津軽屏風の記事も『日本名宝物語』第二輯¹⁹に加筆修正して再録された。そしてさらに『芸術日本』六〇号に改めて加筆修正して再録されることになる。²⁰ このように、『読売新聞』連載（史料七）、『日本名宝物語』第二輯（史料八）、『芸術日本』六〇号（史料九）と、三種の論考が存在するのである。かつて岡本良一氏²¹が史料九を紹介し、それまでは「ほとんどその存在を知る者がいなかった」としたが、それはやや不正確であった。

津軽屏風はその後昭和一三年の朝日新聞社主催「戦争美術展」、同じく朝日新聞社主催による昭和一五年の「二千六百年史展覧会」

にも出展されている²²⁾。特に『アサヒグラフ臨時増刊戦争美術展号』巻頭には、津軽屏風左隻第一〜四扇のカラー図版、そして全図もモノクロながら同書一四頁に掲載されている。カラー図版は津軽屏風も含めて二点しかなく、この時点で既に大きな注目を集めていたことがわかる²³⁾。戦後についてはまだ十分な調査を行っていないが、『戦国合戦絵屏風集成』²⁴⁾に多くのカラー図版入りで取り上げられている。同書は現在でもなお、津軽屏風研究の基礎文献である。

従来は最終稿である『芸術日本』六〇号所収論考にしか言及されていないが、その元になった前記二種も津軽屏風に関する最初の研究であり、またその記述の変遷を跡づけておくことにも意味があると思われるので、これら三種の津軽屏風関係記事・論文をいづれも紹介する²⁵⁾。なお、史料九の執筆者である一ノ瀬方丈氏は、読売新聞社の社員として、「日本名宝展」の取材にあたった人物であろう。一ノ瀬氏は史料九以外にも『芸術日本』に寄稿しているが詳細は不明である。

このなかで注目されるのは、宝永五年（一七〇八）に老中土屋相模守ほか幕閣が、弘前藩津軽家に懇望して、同藩の本所下屋敷で一覽したという記事である。土屋相模守とは、常陸国土浦藩主土屋政直である。貞享四年（一六八七）〜宝永七年まで老中を務めており、宝永五年当時は筆頭老中である。弘前藩津軽家文書は、大部の江戸日記が伝来していることで有名であるが、宝永五年の江戸日記を通覧したが、該当する記事は見当たらなかった（宝永四年も同じ）。これは江戸日記の記事が上屋敷中心であることによる可能性もあるが、老中ら幕閣の訪問であれば、それが記録に残っていないのは不審である。もちろん、筆者の調査はまだ氷山の一角にしか及んでおらず、今後とも調査を続けていかなければならないが、弘前藩政史料のなかで津軽屏風や満天姫の関連記事を見出すことは非常に難しいのが現状である²⁶⁾。

むすびにかえて

本稿は、大阪歴史博物館所蔵「関ヶ原合戦図屏風」（津軽屏風）の基礎的研究として、その来歴に関わる文献史料を紹介した。詳細は、末尾の翻刻を御覧頂きたい。

津軽屏風は戦国合戦図屏風の代表的存在であり、また関ヶ原合戦の勝者である徳川家康が作成されたとされる貴重な絵画資料であ

る。しかし本稿で紹介したように、その来歴を裏付ける文献史料はきわめて少なく、近世史料にいたっては皆無であるというのが現状である。これは近世と現代では津軽屏風に対する注目度が異なるという事情もあるが、歴史学・美術史学における合戦図研究の遅れによる面も否定できない。今後とも、文学研究者も含めて学際的に研究を積み上げていく必要があるだろう。

注

- (1) 戦前の高柳光寿「戦争絵巻並に屏風について」、同「長篠長久手、関ヶ原、大坂陣絵屏風並に倭寇絵巻」(ともに『古美術』一四七、一九四三年)が先駆的な研究である。
- (2) 黒田日出男『姿としぐさの中世史』(平凡社、一九八六年)、『謎解き洛中洛外図』(岩波新書、一九九六年)等
- (3) 五味文彦『中世のことばと絵』(中公新書、一九九〇年)、『絵巻で読む中世』(ちくま新書、一九九四年)等
- (4) この他に、小島道裕氏による洛中洛外図屏風の研究(『描かれた戦国の京都』、吉川弘文館、二〇〇九年、等)、須田牧子氏による倭寇図巻の研究(『倭寇図巻』「抗倭図巻」をよむ)(勉誠出版、二〇一六年、等)がある。
- (5) 『戦国合戦図屏風の世界』(和歌山県立博物館展示図録、一九九七年)
- (6) 二〇一六～一八年度科学研究費補助金・基盤研究B(一般)「戦国軍記・合戦図屏風と古文書・古記録をめぐる学際的研究」(研究代表者・堀新、課題番号16H03430)
- (7) 二〇一六～一八年度東京大学史料編纂所特定共同研究「戦国合戦図の総合的研究」(研究代表者・金子拓(二〇一七年度まで)、黒嶋敏(二〇一八年度のみ))
- (8) その成果は、金子拓編『長篠合戦の史料学』(勉誠出版、二〇一八年)を参照。
- (9) 白峰旬『新「関ヶ原合戦」論』(新人物往来社、二〇一一年)等
- (10) 井上泰至編『アジア遊学二二二 関ヶ原はいかに語られたか』(勉誠出版、二〇一七年)、二〇一七年度軍記と語り物研究会シンポジウム「戦国合戦図の問題系」(『軍記と語り物』五四、二〇一八年、に収録)
- (11) 山本聡美「近世合戦図の画像学」(『軍記と語り物』五四、二〇一八年)
- (12) 成田末五郎「津軽藩旧記伝類解説」(『みちのく双書第五集 津軽藩旧記伝類』、青森県文化財保護協会、一九五八年)。同書は昭和五七年(一九八二)に国書刊行会より復刊。

- (13) 「津軽藩旧記伝類」二(国文学研究資料館所蔵「津軽家文書」,請求番号22B/6/9-2)
- (14) 東京大学史料編纂所架蔵謄写本「津軽旧記伝」(請求番号415-1386)
- (15) これは羽賀与七郎「新刊紹介『津軽旧記伝類』(みちのく双書第五集)」(『弘前大学国史研究』二三、一九五八年)でも紹介されている。
- (16) 一ヶ所、朱筆で明治十四年の書き込みが見られるが、これは後の書き込みかと思われる。
- (17) 日本名宝展開催の経緯は、佐野真一『巨怪伝』(文藝春秋社、一九九四年)に詳しい。
- (18) 『読売新聞』昭和五年四月五日(共立女子大学図書館電子資料「ヨミダス歴史館」による)
- (19) 読売新聞社編『日本名宝物語』第二輯(誠文堂、一九三〇年)
- (20) 一ノ瀬方丈「関ヶ原大合戦図屏風」(『芸術日本』六〇、一九四一年)
- (21) 岡本良一「関ヶ原合戦図屏風」(桑田忠親・岡本良一・武田恒夫編集『戦国合戦絵屏風集成』三・関ヶ原合戦図、中央公論社、一九八〇年)
- (22) 朝日新聞社主催「戦争美術展」(『アサヒグラフ臨時増刊戦争美術展号』、一九三八年)、同じく「二千六百年史展覧会」(『二千六百年史展覧会大観』、一九四〇年)これら戦前における津軽屏風の位置づけは、全て藤本正行氏の御教示による。藤本氏にあつく御礼申し上げる
- (23) 『アサヒグラフ臨時増刊戦争美術展号』(一九三八年)の内容は、共立女子大学図書館電子資料「朝日新聞記事データベース開蔵Ⅱ」による
- (24) 前掲註(21)
- (25) 雑誌『芸術日本』(東京美術親交会芸術社)は国会図書館にも収蔵されておらず、最終号もわからない貴重資料である。管見の限り、筆者が五八号を所蔵する他、早稲田大学演劇博物館が創刊号、東京国立博物館が二〇号と二二号、日本近代文学館が三五号と四四号を所蔵する他は、京都市立芸術大学附属図書館が三三号分(一五〜一七、一九〜二〇、二二〜二三、二九、三一、三三〜三六、四六〜五四、五六、五九〜六〇、六二〜六八)を所蔵するのみである。このような貴重資料の閲覧を許可された京都市立芸術大学附属図書館にあつく御礼申し上げる。なお、「日本名宝物語」の掲載は四七号(一九三九年)から始まり、断続的に六八号(一九四一年)まで確認できる。その後は『芸術日本』刊行の有無も含めて不明である。
- (26) 満天姫については、「満天姫君之儀二付公儀江差出候書付之写」(弘前市立図書館)・「葉縦院様久松家御続書人」(弘前市立博物館所蔵)しか見出せていない。なお、史料閲覧のさい弘前市立博物館の三上幸子・斎藤明日美両氏の御高配に預かった。あつく御礼申し上げます。



図2 津軽藩旧伝記類第2 (本文)
弘前市立図書館所蔵



図1 津軽藩旧伝記類第2 (表紙)
弘前市立図書館所蔵



図4 古日記集録下案 (本文)
弘前市立図書館所蔵



図3 古日記集録下案 (表紙)
弘前市立図書館所蔵



図5 日本名宝物語 36『読売新聞』
昭和5年4月5日付

【史料翻刻】

史料一 刊本『津輕藩旧記伝類』（みちのく双書第五集）

寛永十五年三月廿二日満天姫君、弘前御城に於御逝去。御年五十。御法号葉縦院殿。葬于長勝寺。津輕系譜。

満天姫君、或年家康公へ御願被_レ成候ハ、子孫へ長く宝に仕度候間、関ヶ原御屏風二双の内、一_(イ)双拝借仕度旨、申上_レければ、家康公、仰に、其義ハ迎も望に叶ひかたし。外の品なれハ何なりとも望に叶ふべし、と、申_レければ、姫君余の御品ハ少も望無_二御座_一候。何分にも頂戴被_レ仰付度旨、泪を流して無_レ余義御願被_レ遊ける故、家康公にも左程のことならバ、暫く頂け置の間、少しく遠国のなくさみにもせよと、御預被_レ遊けるとなり。藤田氏日記。

史料二 「津輕旧記伝」二（東京大学史料編纂所）

寛永十五年三月廿二日、満天姫君弘前御城に於て御逝去、御年五十、御法号葉縦院殿、葬于長勝寺。津輕系譜

満天姫君或年、家康公へ御願被成候ハ、子孫へ長く宝に仕度候間、関ヶ原御屏風二双の内一_(イ)双拝借仕度旨申上_レければ、家康公仰に、其義ハ迎も望に叶ひかたし、外品なれハ何なりとも望に

叶ふへしと申_レければ、姫君余の御品ハ少も望無御座候、何分にも頂戴被仰付度旨、泪を流して無余義御願被遊ける故、家康公にも左程の事ならハ暫く頂け置の間、少しく遠国のなくさみにせよと御預被遊けるとなり、藤田氏旧記

史料三 「津輕藩旧記伝類」二（国文学研究資料館）

寛永十五年三月廿二日、満天姫「君」(朱筆)弘前御城に於て御逝去、御年五十、御法号葉縦院殿、葬于長勝寺。「津輕系譜」_(工藤家記)

満天姫君或年、家康公へ御願被成候ハ、子孫へ長く宝に仕度候間、関ヶ原御屏風二双の内「一_(イ)双」(朱筆)拝借仕度旨申上_レければ、家康公仰に、其義ハ迎も望に叶ひかたし、外品なれハ何なりとも望に叶ふへしと申_レければ、姫君余の御品ハ少も望無御座候、何分にも頂戴被仰付度旨、泪を流して無余義御願被遊ける故、家康公にも左程のことならハ暫く頂け置の間、少しく遠国のなくさみにもせよと御預被遊けるとなり、藤田氏旧記

史料四 「津輕藩旧記伝類」二（弘前市立図書館）

寛永十五年三月廿二日、満天姫君弘前御城に於て御逝去、「行間補筆」「御年五十、」御法号葉縦院殿、葬于長勝寺。「工藤家記」津輕系譜

「一_(イ)字下」満天姫君或年、家康公へ御願被成候ハ、子孫へ長く宝に仕度候間、関ヶ原御屏風二双之内一_(イ)双拝領仕度旨申上_レければ

ハ、家康公仰に、其義ハ迎も望に叶ひかたし、外品なれハ何なりとも望に叶ふしと申ければ、姫君余の御品ハ少も望無御座候、何分にも頂戴被仰付度旨、泪を流して無余義御願被遊ける故、家康公にも左程のことならハ暫の間頂け置の間、少しく遠国のなくさみにもせよと御預ケ被遊けるとなり、「藤田氏旧記」後何年の頃か、公儀より右御屏風御尋の時、焼失の旨にて御断申上しと也、「書名」

【補註】

朱筆の頭注「此条評義ノ上」があり、全て抹消されている。

史料五 「古日記集録下案」(弘前市立図書館)

信牧妻満天姫ハ、將軍家康養女、松平因幡守康元女ナリ、慶長十八年六月婚禮、満天姫ハ家康ノ寵愛深シト云、或時強テ家康ニ乞テ、関ヶ原「大合戦」ノ屏風ヲ借「シラ」ル、後、追々不返シテ賜ハリシトナリ、又或時、家康画像三通ノ内壹通、強テ賜ハリシトナリ、是皆徳川家ニ三ツトナキ重宝ニシテ、実ニ津輕家ノ榮余ナリト云、

【補註】

掲出部分の全ての文言に、抹消線が引かれている。

史料六 「津輕藩旧記伝類」八(弘前市立図書館)
(奥書)

此書八冊全篇之成レル由縁ハ、初明治四五年ヨリ文部省ニ一局ヲ設ケラレテ修史局ト称ス、然シテ川田剛ヲ以テ局長トス、此時剛ノ属僚十二人ヲ命セラル、保躬其中ニアリ明治七年ヨリ太政官一属セラレテ修史局トナセラルル、此時我カ藩ノ正史実録タルモノ一冊モ局中ニ上申セルモノク、又参考トナルモノモナクシテ、却テ「局中ニ」之レアルモノハ、我カ藩祖為信公ヲシテ叛臣・逆臣伝トナスヘキモノ及ヒ累代ノ君公ノ美德・偉蹟ノ、廟堂ノ正史ニ記載トナルモノナシ、「タマ補筆アレハ又以テ藩侯ノ名ヲ汚スヘキモノアリ、」保躬悲泣慷慨、天地ニ慟哭スルシテ止ス、遂ニ四位公ニ謁スルコト数回、事状ヲ陳上スル、極メテ反復丁寧ヲ尽セリ、公大ニ感歎シ玉ヒテ、膝下ニ待スル屢也、遂ニ「決」議シテ命スルニ、云々ヲ以テス、於是「予」官暇ヲ「乞」賜ヒ、藩地ニ下着、保躬十六歳ノトキヨリ記録謄写セルモノ及ヒ、遍ク藩記及ヒ日記又諸家所藏ノ秘記録ヲ借覽瞻写セシメ、又ハ「或ル」凡テノ記類ヲ網羅シ、之ヲ東京ニ致送シテ、之ヲ兼松成言・樋口建良・予ト三人評議論決、其粗ヲステ精ヲ取テ、以テ一大歴史成ル、是即津輕旧記類纂ナリ全部三十五冊付録三巻、明治十一年五月ニ至テ、全部ヲ四位公ヨリ太政官へ上申ス、後「同」十二・十三年中修史館ヨリ命アリテ、維新勤王諸藩ノ世家列伝ノ成功ヲ急ニ「スト」、因リテ早く

〔其藩主ノ〕^{（行間補筆）}世家及ヒ藩士三民ノ列伝トナルヘキモノヲ上申セヨ

ト、於是君家累世ノ世家及公族ノ伝数冊ヲ上申ス^{（二十余巻）}、其書ハ建良及藤田貞固等、公命ヲウケテ成功ス、斯テ此書ハ樋口ト予ト命ヲウケタレトモ、予岩木山神社ノ神官タルヲ以テ、其事ヲ成スヤ十ノ八九ニモ及ハス、樋口・藤田悉ク其功ヲ遂タリ、其書ハ即此八冊ナリ、然レトモ或旧大小参事等数人及小山内建麿ト予トハ其議ニ預ルコト一モ洩サルナリ、書成テ清書三部ヲ就セリ、今此八冊ハ草稿ノ真面^{（物字リ）}、予乞テ秘藏スルモノナリ、又曰ク此書ノ全部ハ悉ク津輕旧記類纂ノ拔萃ナルモノナリ、只之ヲ部分セルモノハ、君命ト修史館命トニ因リテ記セルモノナリ、一モ私論僻説ヲ用キサル也、他^{（半）}■廟堂ノ正史成テ、其功無功ハ千万載ニ遺伝スヘシ、因テハ子孫謹テ此書ヲ他人ニ貸シ、或ハ見セシムルコトアルコトナカレ、

明治十六年夏

下沢保躬誌

史料七 『読売新聞』昭和五年四月五日

（見出し）

日本名宝物語三六

第二回名宝展

わが邦戦画中の金字塔

自四月十九日至五月十四日

関ヶ原大合戦屏風

上野美術館に開催

家康の似顔と鎧武者二千廿六名

津輕義孝伯爵家の秘宝

天下分目の関ヶ原合戦——と口では云ふもの、誰一人見たことも無い実戦を、手に取る如く一望の下に眺めらるる「なげし上大屏風」八曲一双が、名宝展のため初めて発見され、弘前の旧城主津輕義孝伯爵家から出品される、その戦況を史実に拠つて頭に描き乍ら、これを鑑賞すること頗る興味あるばかりでなく、その中に偉傑家康の似顔が描かれてあることは、美術的に見て稀有だとされ、歴史と美術との両方面に亘る国宝級の名屏風として専門家が激称已まぬ所である。

慶長五年八月廿五日東軍は赤阪宿外れの岡山に陣を張り、六十間に三十間の本営を中心に二十余町四方を諸将の陣とし、藤堂高虎の首唱で家康の来着を待つ、その本陣に津輕家の旗幟が翻へつて居るかと思れば、九月一日江戸を出発した家康が、十四日呂久川を渡り、禿頭に鉢巻して馬上に疾駆して来着する光景が描かれ家康は丸顔に薄い髻で、馬は栗毛（後世に描かれた肖像はこの似顔から取つたらしい）其の周囲には槍持の大久保彦左衛門、筒持は鬼と云はれた渡辺半蔵、これ等勇士の面々が走り、先頭には抜刀隊が駆け、棒先に家康の兜を翳す徒士あり、続くは三万二千七百騎——さながら画中に蹄の音が聞かれる如くである。

その日の午後四時頃西軍では三成、秀家、行長等が家康来着の
実否で議論の最中、東軍では斥候を出して西軍の兵数を索らせて
居る、五時頃に斥候が戻つての報告はみな十万位といふ中に黒田
の臣毛屋武久のみが二万だと云ふ、家康の答間に武久が答へる。
「いや、十四五万は居るが山上陣地の兵は平地戦に加はず、実
際に戦ひ得るは二万である」

そこで家康は、金吾中納言の裏切りをわざと敵陣に知らせて動
揺させ、大坂に進発すると見せたので、西軍は夜七時頃雨の中を
大垣城発、関ヶ原へ向つて東軍の先方を遮断せんとする。

午前二時、家康は寢所に於てこの情報を耳にし、忽ち跳び起き
て出発——九月十五日、関ヶ原の決戦となる、この戦況が半双の
屏風一杯に描かれてあるから痛快ではないか。

夜來の雨は霏々として止まず、加ふるに大霧冥朦、東軍の先頭
福島軍可兒才藏の小隊と西軍の殿兵とが知らずに混乱、顔を見て
やつとばかりに前哨戦の火蓋を切る、午前八時頃のことである。

秀秋は洞ヶ峠の松尾山上より、霧の晴れ間にちらつく戦況を觀
望中、間諜の奥平貞、大久保猪之助が前隊長の松野主馬に叛撃を
勧むる折しも、家康は「金吾の向背を試みよう」とばかり、松尾山
目指して一斉射撃を命じる、驚いた秀秋は直ちに叛逆命令を下
し、呐喊して山を下る、これを見た家康は、喊声を揚げさせて総
攻撃に移り、遂に白兵戦となる——家康は軍を指揮するに、握り

拳を打振る癖があり熱すると前鞍を叩くので拳の節々が裂けて血
が滴つたと云ふ。

この半双の屏風では、右端秀秋がなほ松尾山上に在る所から、
小西陣、島津陣の焼失する光景、石田陣は崩れ、林中に切腹する
者、介錯せらるゝ者、或ひは拔身を担いで敗走し、武具を剥がれ
た死体は軋々とし、或ひは空馬を曳いたり、玉宝寺山から伊吹山
にかけて絡繹として続く落人などが、詳かに描かれてある。

この大屏風は家康の異父弟たる関宿城主松平因幡守康元の女満
天姫が、最初に嫁した福島正則の嫡男刑部少輔正之幽死のため暫
く江戸城に在つた所、慶長十七年家康これを養女として津輕家二
代越中守信牧に嫁がしめた際携帯の品、その後宝永五年老中土屋
相模守外各重臣等が同家に懇望し、本所の下屋敷で一覽昔語りを
したとか——合戦直後に作られたものと見え、勇士の面々はもと
より、関ヶ原一帯の地形、配陣等がびつたり合致して面白く、描
かれた鎧武者は実に二千二十六人の多数、その人物が悉く桃山式
に描かれて表情に愛嬌あり、連山の起伏に応じて金の雲紋を置
き、これに陸地を配すること頗る巧妙、大空を現はす群青の効果
は素晴らしく天晴れ大合戦にふさはしい古狩野派の画格、まこと
実戦画として空前絶後の一大傑作で、画中聳然と屹立する伊吹山
の巨姿と共に、この名屏風は我が三千年史上の大記録、美術界の
金字塔である。

関ヶ原大合戦屏風 津輕義孝伯爵家所蔵

天下分目の関ヶ原合戦——と口では云ふもの、誰一人見たことも無い実戦を、手に取る如く一望の下に眺めらるる「なげし上大屏風」八曲一双が、弘前の旧城主津輕義孝伯爵家に秘蔵されて居ることが最近に解つたのである、史実に拠つてその戦況を頭に描き乍ら、これを鑑賞するならば頗る興味あるばかりでなく、その中に偉傑家康の似顔が描かれてあることは、美術的に見て稀有だとされ、歴史と美術との両方面に亘る国宝級の名屏風として、専門家が激称已まぬ所である。

○ 慶長五年八月廿五日東軍は赤阪宿外れの岡山に陣を張り、六十間に三十間の本営を中心に二十余町四方を諸將の陣とし、藤堂高虎の首唱で家康の来着を待つ、その本陣に津輕家の旗幟が翻へつて居るかと思れば、九月一日江戸を出発した家康が、十四日呂久川を渡り、禿頭に鉢巻して馬上に疾駆して来着する光景が描かれ、家康は丸顔に薄い髯で、馬は栗毛（後世に描かれた肖像はこの似顔から取つたらしい）その周囲には槍持の大久保彦左衛門、筒持は鬼と云はれた渡辺半蔵、これ等勇士の面々が走り、先頭に

は抜刀隊が駆け、棒先に家康の兜を翳す徒士あり、続くは三万二千七百騎——さながら画中に蹄の音が聞かれる如くである。

○ その日の午後四時頃西軍では三成、秀家、行長等が家康来着の实否で議論の最中である。

「まだ来るものか、今頃は景勝と合戦の最中だ」と云ふは島勝猛。「さうだ、策略のために旗印を本陣に出したに相違ない、白旗は金森父子の分だよ」と相槌を打つは蒲生郷舎。

斯かる所に三人の斥候が戻る。

「半蔵が居る、大御所が来着したに定つてゐる」
との報告に、忽ち西軍は動揺する。

その頃、東軍では斥候を出して西軍の兵数を索らせて居る。五時頃に斥候が戻つての報告はみな十万位といふ中に、黒田の臣毛屋武久のみが二万だと云ふ、家康の各間に武久が答へる。

「いや、十四五万は居るが山上陣地の兵は平地戦に加はず、実際に戦ひ得るは二万である。」

そこで家康は、金吾中納言の裏切りをわざと敵陣に知らせて動揺させ大阪に進発すると見せたので、西軍は夜七時頃雨の中を大垣城発、関ヶ原へ向つて東軍の先方を遮断せんとする。

午前二時、家康は寢所に於てこの情報を耳にし、忽ち跳び起きて出発——九月十五日、関ヶ原の決戦となる。この戦況が半双の

○ 屏風一杯に描かれてあるから、痛快ではないか。

夜來の雨は霏々として止まず、加ふるに大霧冥朦、東軍の先頭福島軍可児才藏の小隊と西軍の殿兵とが知らずに混乱、顔を見て、やつとばかりに前哨戦の火蓋を切る、午前八時頃のことである。

○ 秀秋は洞ヶ峠の松尾山上より、霧の晴れ間にちらつと戦況を觀望中、間諜の奥平貞、大久保猪之助が前隊長の松野主馬に叛撃を勧むる折しも、家康は「金吾の向背を試みよ」とばかり、松尾山目指して一斉射撃を命じる、驚いた秀秋は直ちに叛逆命令を下し、吶喊して山を下る、これを見た家康は、喊声を揚げさせて総攻撃に移り、遂に白兵戦となる——家康は軍を指揮するに、握り拳を打振る癖があり、熱すると前鞍を叩くので、拳の節々が裂けて血が滴つたと云ふ。

○ この半双の屏風では、右端秀秋がなほ松尾山上に在る所から、小西陣、島津陣の焼失する光景石田陣は崩れ、林中に切腹する者、介錯せらるゝ者、或ひは拔身を担いで敗走し、武器を剥がれた死体は転々とし、或ひは空馬を曳いたり、玉宝寺山から伊吹山にかけて、絡繹として続く落人などが、詳かに描かれてある。

○ ところで、この大屏風は家康の異父弟たる関宿城主松平因幡守

康元の女満天姫が、最初に嫁した福島正則の嫡男刑部少輔正之幽死のため、暫く江戸城に在つた所、慶長十七年家康これを養女として、津輕家二代越中守信牧に嫁がしめた際携帯の品、その後宝永五年老中土屋相模守外各重臣等が同家に懇望し、本所の下屋敷で一覽、昔語りをしたとか——この大戦に参加した勇士の実戦談を根拠として、恐らく合戦直後に作られたものらしく、勇士の面々はもとより、関ヶ原一帯の地形、配陣等がびつたり合致して面白く、描かれた鎧武者は実に二千二十六人の多数、その人物が悉く桃山式に描かれて表情に愛嬌あり、連山の起伏に応じて金の雲紋を置き、これに陸地を配すること頗る巧妙、大空を現はす群青の効果は素晴らしく、天晴れ大合戦にふさはしい古狩野派の画格、まこと実戦画として空前絶後の一大傑作で、画中聳然と屹立する伊吹山の巨姿と共に、この名屏風は我が三千年史上の大記録、美術界の金字塔である。

史料九 一ノ瀬方丈「名宝物語 関ヶ原大合戦屏風 津輕伯爵家所蔵」〔芸術日本〕六〇号)

天下分目の関ヶ原合戦——と口では云ふものの、誰一人見たことも無い実戦を、手に取る如く一望の下に眺められる「なげし上大屏風」八曲一双が、弘前の旧城主津輕義孝伯爵家に秘蔵されて居ることが最近に解つたのである、史実に拠つてその戦況を頭に

描き乍ら、これを鑑賞するならば頗る興味あるばかりでなくその中に偉傑家康の似顔が描かれてあることは、美術的に見て稀有だとされ、歴史と美術との両方面に亘る国宝級の名屏風として、専門家が激称已まぬ所である。

○ 慶長五年八月廿五日東軍は赤阪宿外れの岡山に陣を張り、六十間に三十間の本営を中心に二十余町四方を諸將の陣とし、藤堂高虎の首唱で家康の来着を待つ、その本陣に津輕家の旗幟が翻へつて居るかと思れば九月一日江戸を出発した家康が、十四日呂久川を渡り、禿頭に鉢巻して馬上に疾駆して来着する光景が描かれ家康は丸顔に薄い髻で、馬は栗毛（後世に描かれた肖像はこの似顔から取つたらしい）その周囲には槍持の大久保彦左衛門、筒持は鬼と云はれた渡辺半蔵、これ等勇士の面々が走り、先頭には抜刀隊が駆け、棒先に家康の兜を翳す徒士あり、続くは三万二千七百騎——さすがに画中に蹄の音が聞かれる如くである。

○ その日の午後四時頃西軍では三成秀家、行長等が家康来着の実否で議論の最中である。

「まだ来るものか、今頃は景勝と合戦の最中だ」と云ふは島勝猛。「さうだ、策略のために旗印を本陣に出したに相違ない、白旗は金森父子の分だよ」と相槌を打つは蒲生郷舍。

斯かる所に三人の斥候が戻る。

「半蔵が居る、大御所が来着したに定つてゐる」
との報告に忽ち西軍は動揺する。

その頃東軍では、斥候を出して西軍の兵数を索らせて居る。五時頃に斥候が戻つての報告はみな十万位といふ中に、黒田の臣毛屋武久のみが二万だと云ふ、家康の咎問に武久が答へる。

「いや十四五万は居るが山上陣地の兵は平地戦に加はらず、実際に戦ひ得るは二万である」。

○ そこで家康は金吾中納言の裏切りをわざと敵陣に知らせて動揺させ大阪に進発すると見せたので、西軍は夜七時頃雨の中を大垣城発、関ヶ原へ向つて東軍の先方を遮断せんとする。午前二時家康は寢所に於てこの情報を耳にし、忽ち跳び起きて出発——九月十五日、関ヶ原の決戦となる。この戦況が半双の屏風一杯に描かれてあるから、痛快ではないか。

○ 夜來の雨は霏々として止まず、加ふるに大霧冥朦、東軍の先頭福島軍可児才藏の小隊と西軍の殿兵とが知らずに混乱、顔を見てやつとばかりに前哨戦の火蓋を切る、午前八時頃のことである。

秀秋は洞ヶ峠の山上より、霧の晴れ間にちらつと戦況を觀望中、間諜の奥平貞、大久保猪之助が前隊長の松野主馬の叛撃を勧むる折しも、家康は「金吾の向背を試みよ」とばかり、松尾山目

指して一斉射撃を命じる、驚いた秀秋は直ちに叛逆命令を下し、呐喊して山を下る、これを見た家康は、喊声を揚げさせて総攻撃に移り、遂に白兵戦となる——家康は軍を指揮するに、握り拳を打振る癖があり、熱すると前鞍を叩くので拳の節々が裂けて血が滴つたと云ふ。

○ この半双の屏風では、右端秀秋がなほ松尾山上に在る所から、小西陣島津陣の焼失する光景、石田陣が崩れ、林中に切腹する者、介錯せらるゝ者、或ひは拔身を担いで敗走し武器を剥がれた死体は転々とし、或ひは空馬を曳いたり、玉宝寺山から伊吹山にかけ、絡繹として続く落人などが、詳かに描かれてある。

ところでこの大屏風は家康の異父弟たる関宿城主松平因幡守康元の女満天姫が、最初に嫁した福島正則の嫡男刑部少輔正之幽死のため、暫く江戸城に在つた所、慶長十七年家康これを養女として、津軽家二代越中守信牧に嫁がしめた際携帯の品、その後宝永五年老中土屋相模守外各重臣等が同家に懇望し、本所の下屋敷で一覽、昔語りをしたとか——この大戦に参加した勇士の実戦談を根拠として、恐らく合戦直後に作られたものらしく、勇士の面々はもとより関ヶ原一帯の地形、配陣等がびつたり合致ひて面白く、描かれた鎧武者は実に二千二十六人の多数、その人物が悉く桃山式に描かれて表情に愛嬌あり、連山の起伏に応じて金の雲紋

を置き、これに陸地を配すること頗る巧妙、大空を現はす群青の効果は素晴らしく、天晴れ大合戦にふさはしい古狩野派の画格、まこと実戦画として空前絶後の一大傑作で、画中聳然と屹立する伊吹山の巨姿と共にこの名屏風は我が三千年史上の大記録、美術界の金字塔である。

【追記】

史料入力にあたって、肥後陽子氏（東京大学経済学部図書館）のご協力を得た。あつく御礼申し上げます。